【vol.78】リディアン♭7th スケールを使う時

どうも、大沼です。

今回は『リディアン♭7t を使う時』と言う事で、前回のⅠ7、Ⅳ7 とは違うコード上で、このスケールを使うパターンを見ていきます。

解説としては少しややこしい部分なので、丸暗記する、と言うよりも、必要になった時に辞書で調べるような感じでテキストを使ってもらえれば、と思います。

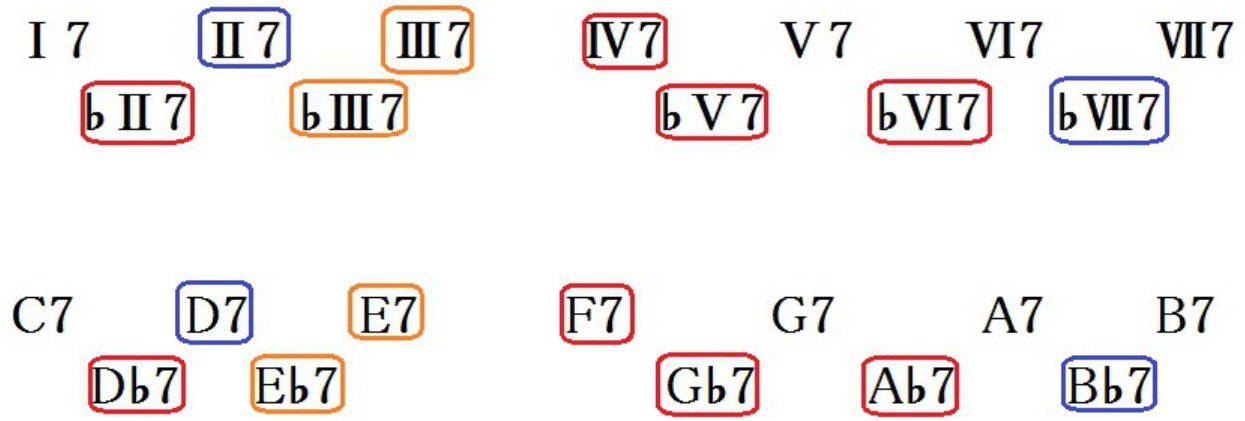
なんだかんだ言って、現代の楽曲(のアレンジ)では、イレギュラーなコードがそれなりに出てくるので、なんとなくでも把握しておいて損はないでしょう。

今回の内容は、その他の特殊スケールを使う時の判断基準ともいえる範囲なので、ゆっくりじっくり、取り組んでいって下さい。

ではまず、色々と解説する事はあるのですが、先に、このスケールを使う可能性のあるコードの一覧表を作ったので、それを見て全体像を掴んでしまいましょう。

ドミナント7thコードが4度進行しないときに、リディアン♭7thスケールを使うコード一覧

- 赤枠 → そのままリディアン♭7thスケールを使う
- オレンジ枠 → 基本的にはリディアン♭7thスケールだが、特定の進行時は別スケールを使う
- 青枠 → メジャーキー時はリディアン♭7thスケールだが、マイナーキー時は別スケールを使う



上部のローマ数字側が純粋なインターバルでの観点、下部の音名側が C 音を 1 度に設定した場合のパターンですね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

リディアン♭7thはドミナント・スケールなので、主にこれらの枠で囲ったX7のコードの上で使う(使える)わけです。

で、上の表の解説にある通り、楽曲のトーナルセンターに対して、赤枠のインターバルに当たるコードが出てきた場合、そこでは普通に、そのコードのルート音をトニックにしたリディアン♭7thを使えばOK、と。

これはそのまま見ての通りなので、他の色枠の条件付きのコード時はどうなるのか？、そこを見ていきましょう。

ちなみに、前回、Ⅰ7に対してリディアン♭7thを使った譜例をやりましたが、それは、Ⅰ7に対する、演奏者側の拡大解釈の様な手法です。

Ⅰ7に対しては、通常、ミクソリディアン(もしくはブルーススケール)等で弾きますが、そこに対して、

『リディアン♭7thもミクソリディアンと同じカテゴリーのドミナントスケールだし、
これで弾いても、まあ、大丈夫だよね』

と、言う感じの解釈をするパターンですね。

なので、先ほどの一覧表では枠で囲っていません。Ⅰ7に対してのスケールは、ベーシックな考え方としては(ほぼ)ミクソリディアンになります。

後、これは非常に重要な事なのですが、一覧表のタイトルに『ドミナント7thコードが4度進行しないとき』とありますね。

『ドミナント7thコードの4度進行』とは、要するにkey＝CならばG7→CM7の時の様な、Ⅴ－Ⅰの動き(強進行)の事です。(ⅤからⅠへのインターバルが4度になるからですね)

楽曲の中で、その曲のキーのⅤ－Ⅰにあたる進行が出てきた時、Ⅴ7の上でリディアン♭7thが使えそうな気もしますが、そこでは(普通は) 使いません。

さらに、その曲のキーのⅤ－Ⅰの進行以外で、部分転調的に、他のキーのⅤ－Ⅰ(Ⅴ7→ⅠM7 or Ⅰm7)にあたる進行が出てきた場合も、そのドミナント7thコードの上でリディアン♭7thは(普通は)使いません。

これについては次回以降の、オルタードスケールの解説の時にまとめてやりますが、4度

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

進行するX7にあたるコードの上では、

・メジャーキー的なＶ－Ｉ(解決先のコードがメジャー系)ならミクソリディアンスケール

・マイナーキー的なＶ－Ｉ(解決先のコードがマイナー系)ならHmp5↓スケール

辺りを使うのが無難なラインでしょう。
(※Hmp5↓はマイナーキーの解説の時に学びましたね)

この他に、ジャズ系のロジックとして、オルタードやコンディミなどが出てくることになりますね。

と、言う事で、ここまでの話から、リディアン♭7thに関する内容を簡単にまとめると、以下の様な感じになりますね。

※key＝C、Ｖ-Ｉの進行(4度進行)の代表的な使用スケール(※一例)

・G7　→　CM7　(Gミクソリディアン　→　Cアイオニアン)

※楽曲の中でⅣ7などのリディアン♭7thが使えそうなコードが出てきた場合
(key＝C時の一例)

・CM7　→　F7　→　Em7　→　Am7　(ＩM7　→　Ⅳ7　→　Ⅲm7　→　Ⅵm7)
Ⅳ7→Ⅲm7が4度進行していないので、Ⅳ7の上でリディアン♭7thを使う

・CM7　→　F7　→　B♭7　→　CM7(ＩM7　→　Ⅳ7　→　♭Ⅶ7　→　ＩM7)
Ⅳ7→♭Ⅶ7が4度進行(この場合B♭キーのＶ－Ｉの動き)しているので、
Ⅳ7の上ではミクソリディアン等を使う

結局、『ドミナント7th(X7)コードが4度進行しているか、否か？』と言う所が、大きなポイントですね。

で、繰り返しになりますが、『X7が4度進行していない　⇒　リディアン♭7thを使う(使える)』と、ストレートに解釈して良いのが、先の一覧表の赤枠のコードです。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

次に、オレンジの枠で示した2つのコード(Ⅲ7と♭Ⅲ7)ですが、これらが出てきたときも、リディアン♭7thが使えます。

ただ、例外となる進行が1つずつあって、

・Ⅲ7　→　Ⅳ(例えばC音がトーナル・センターであればE7→F)の様な進行
　⇒　Ⅲ7上では、オルタード・スケール、コンディミ、♯Ⅲdimスケール

・Ⅲm7　→　♭Ⅲ7(例えばC音がトーナル・センターであればEm7→E♭7)の様な進行
　⇒♭Ⅲ7上では、ミクソリディアン

と、この様な分類がされています。

なぜこう分類されているのか？についてですが、「Ⅲ7→Ⅳ」の方は、Cキーの楽曲で出てきたとしたら、「E7→F」ですね。

E7はCキーのダイアトニックコードには含まれていませんが、Cキーの曲で出てきた場合、Am(Am7)に対してのドミナント7th(Ⅴ7)と見ることが出来ますね。

もし、いきなりE7が出てきた後に、次にAmに進むのなら、Amキーへの部分転調(Ⅴ－Ⅰ)のコードと見れるので話は簡単なんですが、今回の例ではE7→Fなわけです。

では、このFコードは何なのか？と言うと、Amコードのアレンジとして出て来てるんですね。

Amコードの構成音はA、C、Eで、Fコードの構成音はF、A、Cなので、共通音が多く含まれています。

元々のケーデンス(終止形)である、E7→Amと言う進行の場合、E7の構成音(E、G♯、B、D)のトライトーン(G♯とDの関係)が、Amへ進むとG♯→A、D→Cと進み、解決します。

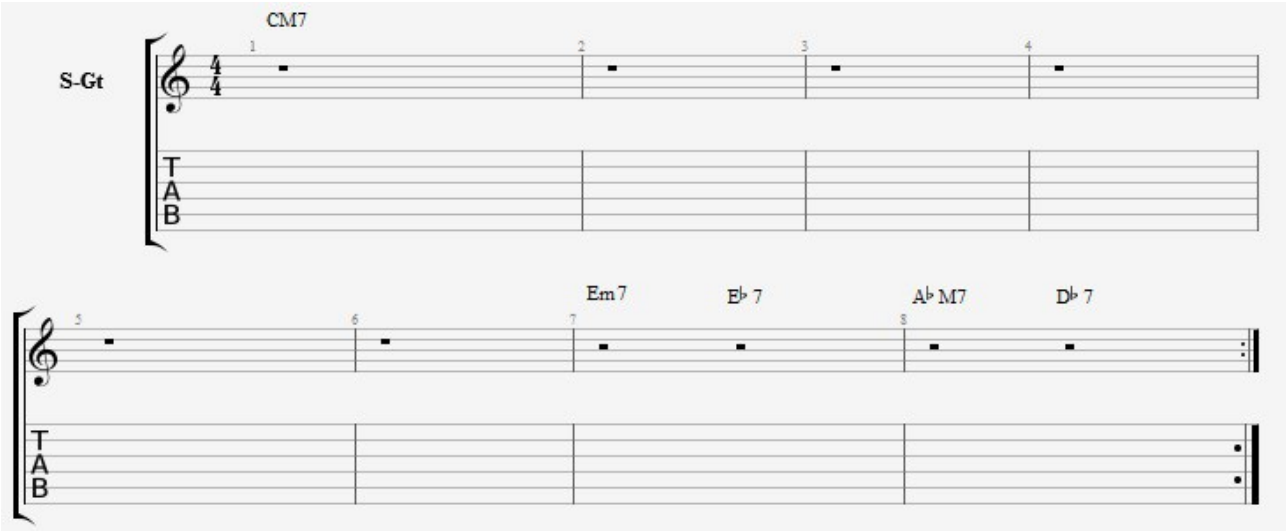
で、この時の重要な変化であるG♯→A、D→Cのトライトーンの解消が、E7→Fの進行の時にも起こるので、FコードがAmコードの代わりの様に出てくるわけですね。

こう解説するとややこしく感じますが、結局、Ⅲ7→Ⅳが、Ⅲ7→Ⅵm(Ⅵmに対するⅤ－Ⅰ)の4度進行の代理進行なので、この場合のⅢ7ではリディアン♭7を使わない、と言うわけです。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

もう一つの、「Ⅲm7→♭Ⅲ7の進行で、♭Ⅲ7上でミクソリディアン」となるパターンは、僕自身は、おそらく今まで見たことが無いのですが、サンプルとなる進行を調べてみると、ターン・アラウンド(コード進行の最後の2小節辺りで、曲頭へ戻るための進行)でこのパターンがある様です。

例えば、Ⅲm7－♭Ⅲ7－♭ⅥM7－♭Ⅱ7－Ⅰ(Cキーなら、Em7－E♭7－A♭M7－D♭7－CM7)の様な進行ですね。



この場合の、♭Ⅲ7上ではミクソリディアンを使う、と言う理論ですが、これも結局、♭Ⅲ→♭ⅥM7(E♭7→A♭M7)の流れが、メジャーキーの4度進行(Ⅴ－Ⅰ)にあたるので、♭Ⅲ7上ではリディアン♭7thではなく、素直にミクソリディアン、と言う分析なのだと思います。

このターン・アラウンドの進行上で、律儀にスケールをチェンジしていく、としたら、素直な分析としては、『Eフリジアン→E♭ミクソリディアン→A♭アイオニアン→D♭リディアン♭7th(→Cアイオニアン等)』みたいな感じになるでしょう。

結局こちらも、4度進行(のバリエーション)か否か？と言う所が、リディアン♭7thを使うかどうかの分水嶺になっている、と考えると、比較的わかりやすくなると思います。

と、言う事で、ここまでが先の一覧表のオレンジの枠のコードの分析になりますね。

実際の所、♭Ⅲ7とⅢ7のコード上で、リディアン♭7thを使わない特定の進行2つの内、Ⅲ7→Ⅳの流れはそれなりに見る気がしますが、Ⅲm7→♭Ⅲ7の流れはあまり見ないと思

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

うので、別段、覚えておく必要性は無いかもしれません。

今後、何かの曲を弾いていて、もし出てきたら確認する、くらいで良いでしょう。

では、残りの青枠の、『メジャーキーの楽曲で出てきたらリディアン♭7th、マイナーキーの楽曲で出てきたら別スケール』の2つのコード(Ⅱ7と♭Ⅶ7)を見ていきましょう。

まず、Ⅱ7についてですが、通常、ダイアトニックコードの理論で考えると、2度のコードは、メジャーキーならⅡm7、マイナーキーならⅡm7(♭5)となりますね。

ですがこの場合、コードがドミナント7thに変化しているので、Ⅱ7が出てきた場合、実質的には部分転調しているようなもの、と言う事になります。

これは俗に言う「セカンダリー・ドミナント(1度以外のダイアトニックコードに対してⅤ7にあたるコード)」なわけですが、ここでⅡ7が4度進行をする(Ⅱ7→Ⅴ)ならば、ミクソリディアンやオルタードなどを弾くわけですね。(※この辺りは主に次回以降の内容です)

では、Ⅱ7が4度進行しない場合はどうするのかと言うと、メジャーキーでのⅡ7(Cキーなら D7)上ではリディアン♭7th、マイナーキーでのⅡ7(Cmキーなら D7)は、オルタードになります。

これについては、元々のキーの基準スケールの構成音と、Ⅱ7(と同じルート音のドミナント7th)が成り立つ他のスケールを見ると関係性が見えてきます。

まず、元々のキーに対してイレギュラーなコードが一時出てきた場合、そのコードの上で使う音を選ぶ際の基本的な考え方としては、「元々のキーからあまり離れないようにする」と言うものです。(※意図的に離そうとしない限り)

例えばCキーの楽曲で、いきなりダイアトニックではないコードが出てきた場合、元々はCメジャースケールが基準スケールなので、構成音はCDEFGABであり、この7音から(普通は)あまり離れない様にしたいわけです。

で、今回はCキーに対してのD7(Ⅱ7)なわけですが、これが4度進行(Ⅴ－Ⅰ的な流れ)をする場合、それは事実上、解決先のコードを1度とするキーへ転調している状態なので、元のキーから変わろうとしているのですから、離れる事に対して敏感になる必要がありませんよね。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

Ⅱ7の4度進行(Ⅱ7→V)の場合、Cキーならば D7→G となり、近親調であるGキーへの変化なので、あまりCキーからは離れませんが、他のパターンでそれ以外のキーへ進む場合は遠いキーへ行く可能性もあるわけです。

ですが、Ⅱ7が4度進行しない場合、まだ、Ⅱ7の時点では、Cキーに寄っていたいわけで、じゃあ、そのコード(Ⅱ7)の上ではどんなスケールを使えばいいのか？と言う話になった場合、Cメジャースケールに構成が近いスケールを使えば、Cキーからあまり離れないことが出来ますよね。

ならば、Ⅱ7と同じコード(今回はD7)を含み、Cメジャースケールの構成音、CDEFGABに近い構成音を持つスケールは何か？と言うと、Aメロディックマイナーがあります。

Aメロディックマイナーは構成音がA、B、C、D、E、F♯、G♯、となっていて、Cメジャースケールに結構近いですし、そもそもCメジャースケールの平行調であるAナチュラルマイナースケールとも強い関係性があるスケールです。

そしてAメロディックマイナーの4度のコードはD7(Ⅳ7)なので、Cキーの D7(Ⅱ7)とコードも合ってる、と。(※メロディックマイナーのダイアトニックコードは、Ⅰ mM7、Ⅱ m7、♭Ⅲ augM7、Ⅳ7、Ⅴ7、Ⅵ m7(♭5)、Ⅶ m7(♭5))

ならば、Cキーで D7(Ⅱ7)が出てきたら、Dリディアン♭7th を使えば、Cキーから離れすぎずに、D7のコードにも対応できてこれで OK だよね、と言う考え方ですね。
(※Aメロディックマイナーと Dリディアン♭7th は同じ構成音)

と、こんな感じで、コードに対して使うスケールがチョイスされていたりします。
(※もちろんこれは一つの見方であり、絶対、と言うわけではありませんが)

同じ様に、マイナーキー時の4度進行しないⅡ7上でオルタードを使う場合でも、元々のマイナーキーの基準スケールと関係性の近さからそうなっています。

こちらは、仮にCmキーの楽曲で D7(Ⅱ7)が出てきた場合、元々のキーの基準スケールはCナチュラルマイナースケールなので、構成音はC、D、E♭、F、G、A♭、B♭です。

この場合の D7で Dオルタードを使う場合、実質的にはE♭メロディックマイナーなので、構成音はE♭、F、G♭、A♭、B♭、C、Dとなり、構成音もかなり近くなっていますね。
（※メロディックマイナーの7度ルートのコードは、ドミナント7th も形成できます）

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

以上の話の様に、コードとスケールの両方の面から、元々の楽曲のキーから離れすぎない事を1つの基準として、分類されていたりします。

残りの♭Ⅶ7についても概要は同じです。

4度進行しない♭Ⅶ7(1度がC音なら B♭7)上で使うスケールは、メジャーキー時はリディアン♭7th、マイナーキー時はミクソリディアン、となっています。

この場合、マイナーキー時は、ダイアトニックコードにそのまま♭Ⅶ7が存在するので、1度(Ⅰm7)がエオリアン、2度(Ⅱm7(♭5))がロクリアン～、と、順番に並べていくと、7度(♭Ⅶ7)に対応するスケールは普通にミクソリディアンになる、と言うわけですね。

メジャーキーの場合、Cを1度に設定すると、♭Ⅶ7にあたるコードはB♭7ですが、Cキーに近いキーで、このコードをダイアトニックコードに持つキーはCmキーです。

Cmキーの基準スケールはナチュラルマイナーで、構成音は
C、D、E♭、F、G、A♭、B♭となっているわけですが、これを見てそのまま、
♭Ⅶ7(B♭7)に対応するミクソリディアンを当ててしまうと、先ほど解説したマイナーキー時の話と同じ事になってしまいますね。

今は、メジャーキー時に♭Ⅶ7が出てきた場合の話なので、もう少しCメジャースケールに近いもので対応したい所です。

で、♭Ⅶ7と同じ形になるコードを持ち、Cメジャースケールに近しい構成音を持つスケールとして出てくるのが、Fメロディックマイナーです。

Fメロディックマイナーの構成音は、F、G、A♭、B♭、C、D、Eで、Cメジャースケールにほど近く、4度(Ⅳ7)がCキーの♭Ⅶ7と同じB♭7です。

そして、Fメロディックマイナーの4度(Ⅳ7)に対応するスケールが、B♭リディアン♭7th、とこういうわけですね。

さて、これで今回のリディアン♭7thを使う時、については終わりなんですが、
ここまでの話を大きくまとめると、

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

・そのドミナント 7th が 4 度進行(Ｖ－Ｉに相当する動き)をしているのか？

→していたら別スケール(これは次回以降の内容)
→していなかったらリディアン♭7th の可能性大

・そのまま素直にリディアン♭7th を使ってもいいのか？

→一部のドミナント 7th は OK、他のドミナント 7th は注意が必要

・注意が必要なドミナント 7th の場合どうするのか？

→リディアン♭7th が当てはまる場合は使える

→当てはまらない場合は、元々のキーに近しい構造を持つ、何かしらのスケールを使う

と、こんな感じですね。

後、ジャズ系のプレイ理論として結構、重要な事なのですが、ドミナント 7th のコードに「G7(♭9)」や「G7(♭13)」と、そもそもオルタード・テンションが含まれている場合、そこでは多くの場合、オルタード・スケール(もしくはコード・トーンに合致する他のスケール) を使うことになります。

逆に「G7(9)」や「G7(13)」とナチュラル・テンションが指定されている場合、進行にも寄りますが、ミクソリディアンやリディアン♭7th を使うことになります。
(※♯11 を含んだドミナント 7th であれば、ほぼリディアン♭7th を使うことになるでしょう)

この辺りは、コード表記にどれだけ指定があるか？みたいなところにも左右されるので、臨機応変に対応していく部分です。

ここまで長々と解説してきましたが、実は、実際にプレイヤーが演奏しているものをアナライズしてみると、これらの理論には当てはまらないプレイをしていることも多々あります。

最終的には、これが正解、と言う話ではなく、1 つの判断基準として見てほしいと思います。

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

結局は、良いプレイかどうか？(メロディー、ハーモニー等)、が、音楽にとって重要な事ですし。

このテキストは迷った時の辞書代わりにでも使ってもらえれば、と思います。

最後のページに、最初の一覧表に使用スケールをまとめたものを載せておくので、プリントアウトするなり、ノートに写すなりしておき、サッと見られるようにしておくと練習がしやすくなるでしょう。

では、今回は以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved

ドミナント7thコードが4度進行しないときに、リディアン♭7thスケールを使うコード一覧

- 赤枠　→　そのままリディアン♭7thスケールを使う
- オレンジ枠　→　基本的にはリディアン♭7thスケールだが、特定の進行時は別スケールを使う
- 青枠　→　メジャーキー時はリディアン♭7thスケールだが、マイナーキー時は別スケールを使う

・メジャーキー時
→リディアン♭7th
・マイナーキー時
→オルタード

・Ⅲ7→Ⅳ
→オルタード等

Ⅰ7　Ⅱ7　Ⅲ7　Ⅳ7　Ⅴ7　Ⅵ7　Ⅶ7

♭Ⅱ7　♭Ⅲ7　♭Ⅴ7　♭Ⅵ7　♭Ⅶ7

・Ⅲm7→♭Ⅲ7
→♭Ⅲミクソリディアン

・メジャーキー時
→リディアン♭7th
・マイナーキー時
→ミクソリディアン

C7　D7　E7　F7　G7　A7　B7

D♭7　E♭7　G♭7　A♭7　B♭7

Copyright (C) 2015 shunichi onuma All Rights Reserved